



TITLE:

花山だより

AUTHOR(S):

月斗

CITATION:

月斗. 花山だより. 天界 1936, 17(187): 27-27

ISSUE DATE:

1936-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167354>

RIGHT:

花 山 だ よ り

◇稲葉氏は演習召集の爲め8月末より広島に行かれ、9月末歸臺された。

◇柴田氏は日食の乾板整理に忙がしく、休暇中も物理教室に通つて熱心に測定されたが、最後の發表迄には相當の日數を要する由。

◇コロナの變動寫眞も特別の測定裝置を考案中であるが、何れ、總ての整理發表は到底本年中には六ヶ敷しいであらう。

◇山本臺長は日食滞在地の各方面への御挨拶旁々、次回の北海道日食準備の爲め該地へ出張中の所、9月10日に歸臺された。

◇12日、第4回談話會では荒木九皐氏のコロナスペクトルの眼視觀測、柴田氏の日食乾板の波長測定結果等頗る興味深く拜聴した。

◇13日、山本教授及び公文氏は大津藤井天文臺の初公開に出席さる。

◇21日、鷲座新星發見電報到着、翌日又 Jackson 彗星發見電報に花山も次第に忙しくなる。折も折故中村氏作の Triplet 寫眞機が故障で相當苦心する。

◇24、25日山本臺長及び高城氏は滋賀縣堅田小學校に出張、經緯度の觀測をさる。

◇支那問題、大演習、颱風の話等花山の食堂も晝間は世間と餘り變つた事は無い。師團の秋季演習で連日銃砲の音が聞える。露臺に反射鏡を持ち出して遠望する人々の姿も頗る朗らかである。四圍の松茸山には繩が張られ、そろそろ松茸の候となつた。

◇教壇に日參してあらぬ現世の御利益を求めるもよいが、時折は星空を仰いで俯仰天地に恥ぢぬ心構への修得も考へられる。

◇毎年春秋の候には花山の見學者も多いが、特に散策を兼ねた小學生の姿が多い。此處十數年も経てば次第に天文學も理解されようが、連日の様に明日の天氣はとか、あすの日の吉凶を見て呉れでは、全く情なくなる。太陽の黒點、白紋を尋ねて天帝に祈りを捧げる等は全く以て沙汰の限りであるが、太陽を單に赤い球と看過するよりは、と見るは僻目か。

◇29日、滿洲國中央觀象臺長谷本誠氏來臺さる。

◇10月3日、公開觀測日。天文協會の例會で臺長の「ロシアの天文學」の講演は頗る面白く拜聴した。(10月6日 月斗生)